

# 博 多 95

— 博多遺跡群第 137 次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第766集

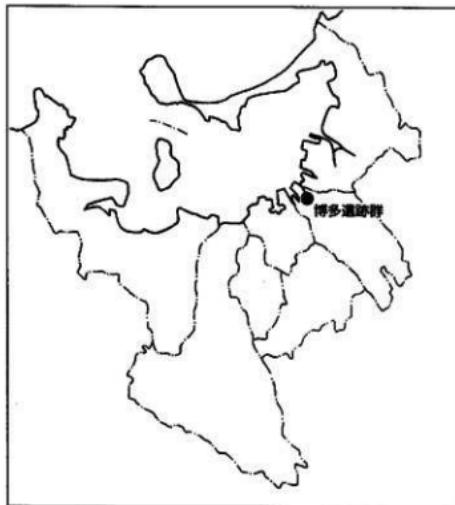
2003年

福岡市教育委員会

# 博 多 95

—博多遺跡群第137次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第766集



調査番号 0152  
遺跡略号 HKT-137

2003年

福岡市教育委員会

## 序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝え残していくことは現代に生きる我々の重要な努めであります。

福岡市教育委員会では、開発事業に伴いやむをえず失われていく埋蔵文化財について事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

本書は共同住宅建設に伴い調査を実施した博多遺跡群第137次発掘調査の報告書です。今回の調査においても多くの貴重な成果を上げることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘にあたり費用負担等のご協力とご理解をいただいた株式会社リファレンスをはじめとする関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成15年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 生田征生

## 例　　言

- 本書は福岡市教育委員会が共同住宅建設に伴い、福岡市博多区中呉服町7-5において実施した博多遺跡群第137次調査の報告書である。
- 本書に掲載した遺構の実測は長野嘉一、中村桂子の補助を得て、上角智希が行った。
- 本書に掲載した遺物の実測は上角が行った。
- 本書に掲載した挿図の製図は上角が行った。
- 本書に掲載した写真は上角が撮影した。
- 本書にかかわる遺物および記録類の整理は久家春美、篠原明美、黒柳恵美、鈴木美保子が行った。
- 本書の執筆・編集は上角が行った。
- 本書で用いる方位は磁北である。
- 遺構の呼称は溝をSD、土壤をSK、掘立柱建物をSB、その他の遺構をSX、ピットをSPと略号化した。
- 本書にかかわる図面、写真、遺物等は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
- 遺物の説明、分類については以下の文献を参考にした。

九州近世陶磁学会編 2000『九州陶磁の編年』

江戸遺跡研究会編 2001『図説 江戸考古学研究事典』柏書房

中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

森田勉 1982「14~16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2

小野正敏 1982「15~16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2

上田秀大 1982「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2

森本朝子・片山まび 2000「博多出土の高麗・朝鮮陶磁の分類試案」『博多研究会誌』8

太宰府市教育委員会 2000『太宰府条坊跡XV-陶磁器分類編』

遺　跡　名	博多遺跡群第137次調査	調　査　番　号	0152
所　在　地	博多区中呉服町7-5	遺　跡　略　号	HKT-137
開　発　面　積	357 m <sup>2</sup>	調　査　面　積	70 m <sup>2</sup>
調　査　期　間	平成14年2月1日~平成14年3月19日		

## 目 次

第一章 はじめに .....	1
1. 調査にいたる経緯 .....	1
2. 調査体制 .....	1
第二章 遺跡の立地と環境 .....	2
第三章 調査の記録 .....	5
1. 調査の概要 .....	5
2. 近世の遺構と遺物 .....	9
3. 中世の遺構と遺物 .....	12
1) 瓦溜まり .....	12
2) 掘立柱建物 (S B) .....	15
3) 石組遺構 (S X) .....	16
4) 土壙 (S K) .....	18
4. その他の出土遺物 .....	23
第四章 まとめ .....	26

## 挿 図 目 次

第1図 博多遺跡群の位置 (1/25,000) .....	3
第2図 第137次調査区の位置 (1/1,000) .....	4
第3図 調査区東壁土層図 (1/50) .....	5
第4図 第1面遺構配置図 (1/60) .....	6
第5図 第2面遺構配置図 (1/60) .....	7
第6図 SK 09 および出土遺物実測図 (1/40、10~12は1/4、他は1/3) .....	10
第7図 SX 16 および出土遺物実測図 (1/60、1/3) .....	11
第8図 SD 05 瓦溜まり土層実測図 (1/30) .....	12
第9図 SD 05 瓦溜まり上層出土遺物実測図①(36、37、41~44は1/4、他は1/3) .....	13
第10図 SD 05 瓦溜まり上層出土遺物実測図②(1/4) .....	14
第11図 SD 05 瓦溜まり下層出土遺物実測図 (56、57は1/4、他は1/3) .....	15
第12図 SB 35 実測図 (1/40) .....	15
第13図 SB 36 実測図 (1/40) .....	16
第14図 SX 10、11、12 石組遺構実測図 (1/30) .....	16
第15図 SX 11、12 出土遺物実測図 (1/3、1/4) .....	17
第16図 SK 03 および出土遺物実測図 (1/40、69~71は1/4、他は1/3) .....	18
第17図 SK 04 および出土遺物実測図 (1/40、1/3) .....	19
第18図 SK 20 および出土遺物実測図 (1/40、1/3) .....	20

第19図	SK 21 および出土遺物実測図(1/40、1/4) .....	20
第20図	SK 22 および出土遺物実測図(1/40、1/3) .....	21
第21図	SK 24、28、33 および出土遺物実測図(1/40、1/3) .....	22
第22図	その他の出土遺物実測図①(1/3) .....	23
第23図	その他の出土遺物実測図②(1/3) .....	24
第24図	その他の出土遺物実測図③(1/4) .....	25
第25図	その他の出土遺物実測図④(1/3) .....	25

## 図 版 目 次

- 図版 1 (1) 西側第1面全景(北東から)  
(2) 西側第2面全景(北東から)
- 図版 2 (1) 東側第1面全景(西北から)  
(2) 東側第2面全景(西北から)
- 図版 3 (1) SD 05 瓦溜まり検出状況(南から)  
(2) SD 05 瓦溜まり検出状況(北から)  
(3) SK 09(南西から)  
(4) SK 22(北から)
- 図版 4 (1) SD 05 瓦溜まり上層の瓦出土状況  
(2) SD 05 土層C-C'(北から)  
(3) SX 11(南東から)  
(4) SK 03(西から)  
(5) SK 20(東から)  
(6) SK 21(北から)
- 図版 5 出土遺物① 陶磁器類
- 図版 6 出土遺物② 博多人形

# 第一章 はじめに

## 1. 調査にいたる経緯

平成13年5月7日付で、大阪メリヤス株式会社取締役社長寺内正巳氏より福岡市教育委員会宛てに、博多区中呉服町7番5号における宅地売買に伴う埋蔵文化財事前審査申請書が提出された（事前審査番号：13-2-89）。これを受けた教育委員会埋蔵文化財課では、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である博多遺跡群に含まれていることから、同年5月24日に試掘調査を実施し、中世の遺構群の存在を確認した。よって、本調査が必要である旨を回答した。その後、同地を取得した株式会社リファレンス代表取締役相部光伸氏より本調査の依頼があり、両者で協議を行い、平成14年2月1日より2.5ヶ月の予定で調査を行うことにした。

## 2. 調査組織

調査は以下の組織でおこなった。

調査委託 株式会社リファレンス 代表取締役 相部光伸

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 生田征生

調査総括 文化財部長 柳田純孝

埋蔵文化財課長 山崎純男

調査第二係長 力武卓治

調査庶務 文化財整備課 御手洗清

試掘担当 大塚紀宣、田上勇一郎

調査担当 上角智希

調査作業 井上ヨシ子、草田綱代、徳山孝恵、富永美樹、長野嘉一、中村桂子、前田勉、宮崎雅秀

整理作業 久家春美、篠原明美、黒柳恵美、鈴木美保子

今回の調査がつがなく進行し、多くの貴重な成果を得ることができたのは、発掘調査および整理作業に従事していただいた発掘作業員、整理作業員の皆様に依るところが大きい。心から感謝いたします。

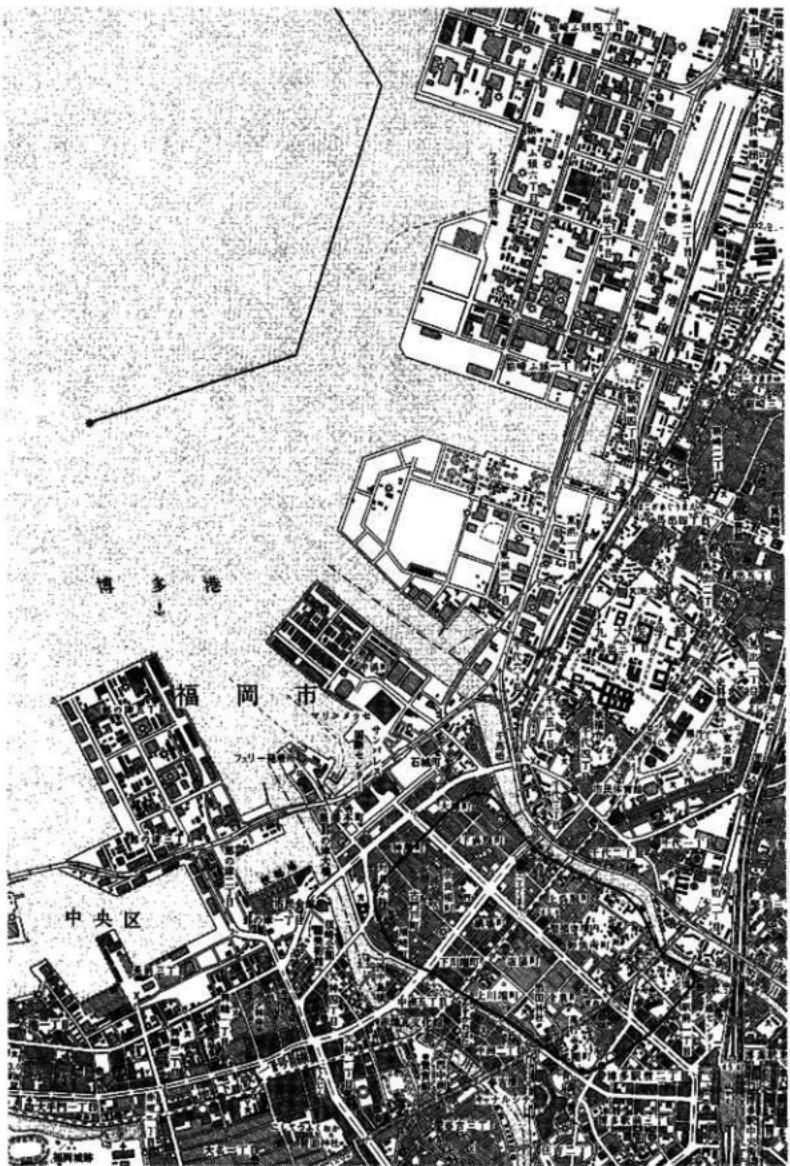
## 第二章 遺跡の立地と環境

博多遺跡群は、中世都市「博多」の時期を中心として、古くは弥生時代から現在までほぼ絶えることなく人々の生活が営まれてきた複合遺跡である。地理的には、博多湾岸に形成された砂丘上に立地し、西を博多川（那珂川）、東を江戸時代に開削された石堂川（御笠川）、南を石堂川開削以前に那珂川に向かって西流していた旧比恵川（御笠川）によって画される。この砂丘は大きく3列から形成されており、内陸側から砂丘Ⅰ、砂丘Ⅱ、砂丘Ⅲと称される。このうち、内陸側の砂丘Ⅰ・Ⅱは「博多浜」と呼ばれ、南西側から北東に延びるラグーンを起源とする狭長な谷部によって区分されている。海側の砂丘Ⅲは「息の浜」と称され、砂丘Ⅱの前面に遅れて形成された砂丘で、12世紀前半からの低地の埋立てによって陸地化が進んでいく。

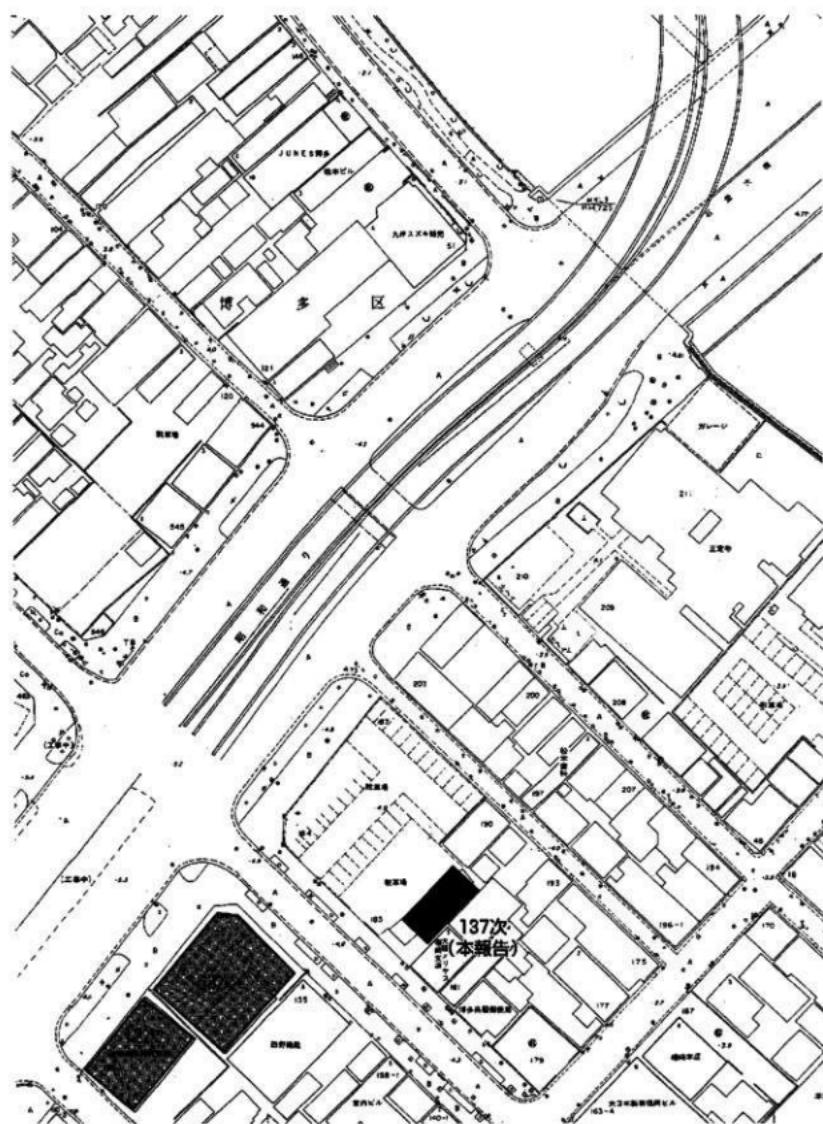
今回報告する第137次調査地点は「息の浜」の東側に位置する。現在の標高は約5.0mで、中世段階には砂丘の東側斜面に位置し、南側と東側にむかって傾斜していたと考えられている。

本地点は戦後の町界町名整理まで官内町に属していた。官内町は東の箱崎方面から石堂橋を渡って博多へ入る最初の町で、町名の由来については『石城志』に「いにしへ太宰府の官人此處に来りて守衛しければ、其の館の有し所を後世官内と名づけしなるべし」とある（井上精三 1983『福岡町名散歩』葦書房）。本地点から東側、石堂川沿いまでは福岡大空襲による焼失を幸運にも免れた。大通りから少し入ると狭い路地に古い家並みが並んでおり、今では貴重になってしまった一昔前の博多の景観を思わせる閑静なたたずまいが残っている。

「息の浜」（沖の浜）は中世に入ってから歴史の舞台に登場する。鎌倉時代の「蒙古襲来絵詞」がその名の初見であるという。鎌倉時代の2度の元寇で博多の町は戦場となり灰燼に帰した。しかし町はすぐに復興し、13世紀末に鎮西探題が博多に設置され、1316（正和5）年に息の浜に月堂宗規が妙楽寺を建立する。南北朝時代ごろから息の浜が急速に発展し、博多の繁栄の中心は從来の博多浜から海側の息の浜へと移る。室町時代後半以降、筑前の小式氏、豊後の太田氏、周防の大内氏らが博多の地の領有権をめぐってたびたび争い、町はそのたびに戦火を受けた。1586年には毛利軍と対峙した薩摩の島津氏の軍によって焼かれ、またもや灰燼に帰した。その翌年、九州平定を成し遂げた豊臣秀吉により博多の町は復興される。このとき從来の街区が廃絶され、新たに道路をつくり、博多の町全体を長方形街区と短冊型地割りで仕切った。いわゆる太閤町割である。現在の町並みも基本的にはこの町割を踏襲している。江戸時代になると、鎖国政策によって貿易都市としての役割を終え、黒田氏の城下町福岡に対する商人の町博多として栄え、現在に至る。



第1図 博多遺跡群の位置（1/25,000）



第2図 第137次調査区の位置 (1/1,000)

### 第三章 調査の記録

#### 1. 調査の概要

##### 1) 調査経過

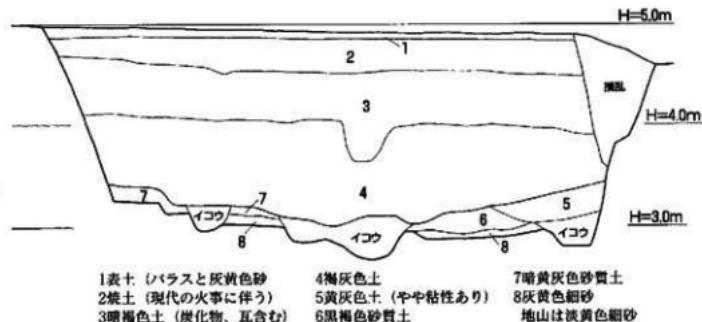
博多遺跡群第137次調査区は福岡市博多区中呉服町7番5号に所在し、現在の標高は約4.8mで南と東に向かってごく緩やかに低くなっている。調査前は宅地と駐車場であった。協議の結果、敷地面積357m<sup>2</sup>中、住宅建築によって破壊される約130m<sup>2</sup>を調査の対象とすることになっていた。しかし、調査前の平成14(2002)年1月21日、既存建築物の解体作業中に現地の状況を確認したところ、敷地南東側の約半分の面積については、建築物のコンクリート基礎により遺構が完全に破壊されていることを確認した。よって、調査面積は70m<sup>2</sup>に縮小した。

既存建造物の解体作業終了を受けて、平成14(2002)年2月1日より調査に着手した。排土を場内に処理する必要から、まず調査区の北側1/3程度を調査し、その後、この部分を排土置き場にして残りの部分を調査することにした。調査は後述する2面について行い、まず表土を重機によって除去し、その後人力による遺構の精査、包含層の掘り下げを行った。

##### 2) 基本層序

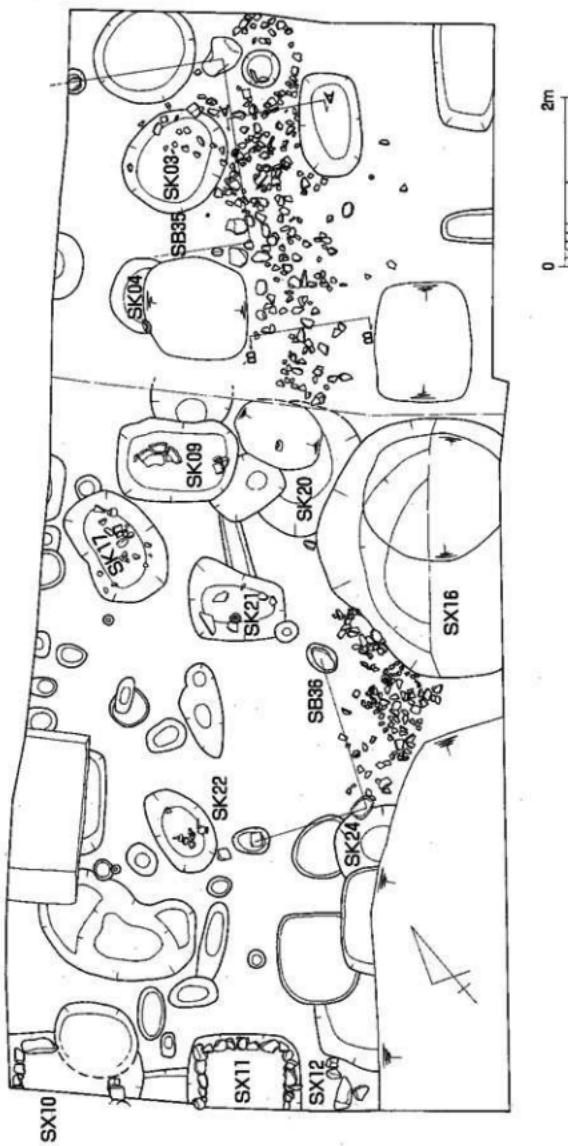
本調査区は博多遺跡群を形成する3つの古砂丘のうち、最も海側の沖の浜に位置している。人々の生活の場となるのは内陸側の博多浜よりずっと遅れ、12世紀頃から低地の埋め立てにより陸地化が進んだと考えられている。博多浜と比較すれば土層堆積はされたものだが、それでも現地表から地盤の砂丘砂までには1.8mほどの堆積層が見られる。

調査区東壁の上層を第3図に示す。搅乱もなく整然とした層序が見られる。第2層の焼土層は福岡大空襲に関わるものかと考え調べたが、本地点より東側はぎりぎり空襲による焼失を免れていた。近所の人の話によれば、以前ここにあった家が火事で焼失したというので、それに伴う層である。第3層は近代以降、第4層は近世～近代の堆積であろう。重機で掘り下げているとき、第4面の下付近で丸瓦、平瓦類が出土したのでこの高さですき取りをやめた。標高3.2～3.5mにあたり、この面を第1面とする。以下、8層まで確認しその下は基盤の淡黄色細砂である。現地形、旧地形とも

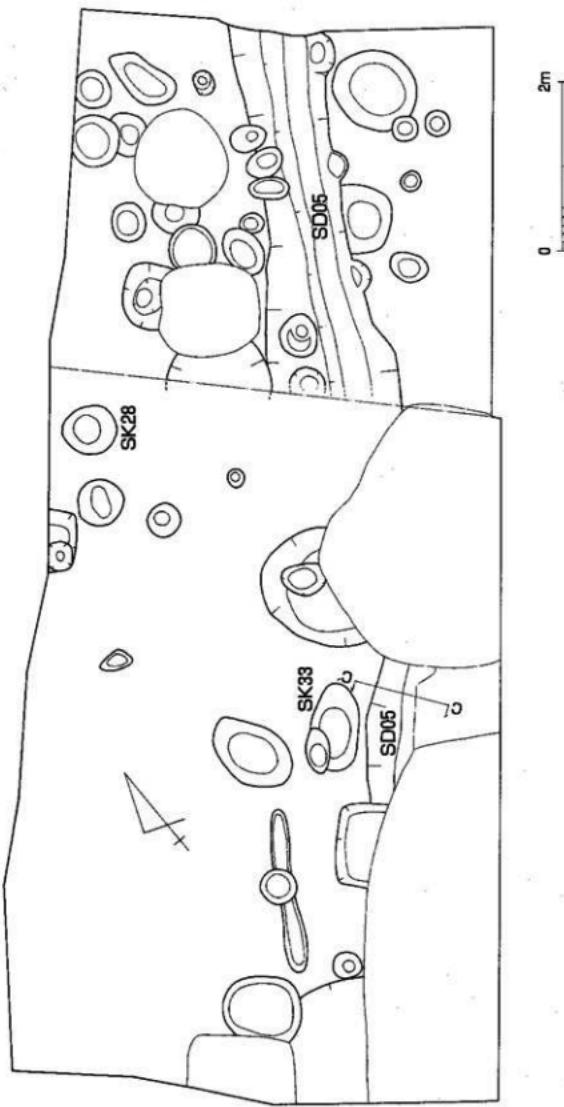


第3図 調査区東壁土層図(1/50)

第4図 第1面遺構配置図 (1 / 60)



第5図 第2面造構配置図（1/60）



に西から東に向かって下がっており、第3図の土層は最も低い部分にあたるため、以後の標高の記述との間に若干の齟齬をきたす場合があるがご了承願う。

### 3) 調査概要

調査は2つの面について実施した。瓦類の出土に伴って重機による堀下げを停止した標高3.2～3.5m付近の高さを第1面とする。この面でまず遺物を残しながら遺構検出を行い、統いて遺構の精査および記録を行った。その後、包含層を20cm程度下げて、標高3.0～3.3mの基盤の砂丘砂上を第2面とし、調査を行った。

結論から言えば、各面で検出した遺構がある特定の時期に集中する傾向はなかった。人為的に検出面を設定したため当然ではあるが、第1面では中世後期から近世（15～18世紀）にかけての、第2面では中世後期の遺構を検出した。したがって、遺構面ごとに報告するよりも時期ごとに報告したほうが分かりやすいと考え、次節以降では時期ごとに個々の遺構・遺物の報告を行うことにし、本項で遺構面ごとの概要を簡単に述べておくことにする。

#### 第1面（第4図）

標高3.2～3.5mに設定した面で、西から東に向かって低くなる。重機で掘り下げ中に瓦類が出土したためにこの高さで遺構面を設定した。まず東側を先に調査したわけであるが、瓦を主とした遺物を残しながら遺構検出を行ったところ、瓦が帯状に分布することが確認でき、瓦溜まりであろうと考えた。この帯状の瓦溜まり（SD05）のほかに、掘立柱建物2棟、石組遺構3基、土壙17基、ピットなどを検出した。遺構の時期は15、16世紀から18世紀にかけて幅広く存在する。

#### 第2面（第5図）

基盤の淡黄色砂丘砂上をもって第2面とした。標高3.0～3.3mを測り、やはり西から東に向かって低くなる。第1面検出の瓦溜まりの下で溝を検出し、溝内に瓦が投げ入れられた状況を確認した。ほかには土壙8基、溝1条、ピット20基程度を検出したぐらいで遺構密度はあまり高くない。やはり15、16世紀より遡る遺構は検出されていない。

今回の調査で出土した遺物の総量は発掘調査段階で大コンテナ26箱、整理・収蔵段階で小コンテナ60箱にのぼる。まず瓦が大量に出土した点が注目される。ほかに中世では中国や李朝からの輸入陶磁器、土師器、近世では国内産陶磁器、土師器などに加え、博多人形が数点出土している。また、後世の遺構に混入して古代や中世前期の遺物がごく少量出土している。

## 2. 近世の遺構と遺物

### S K 0 9 (第6図)

第1面で検出した隅丸方形の土壙である。長軸1.5m、短軸1.0m、深さ0.3mを測る。埋土は黄灰色粘質土でしまりがなく炭化物、赤色粒を含む。

#### 出土遺物

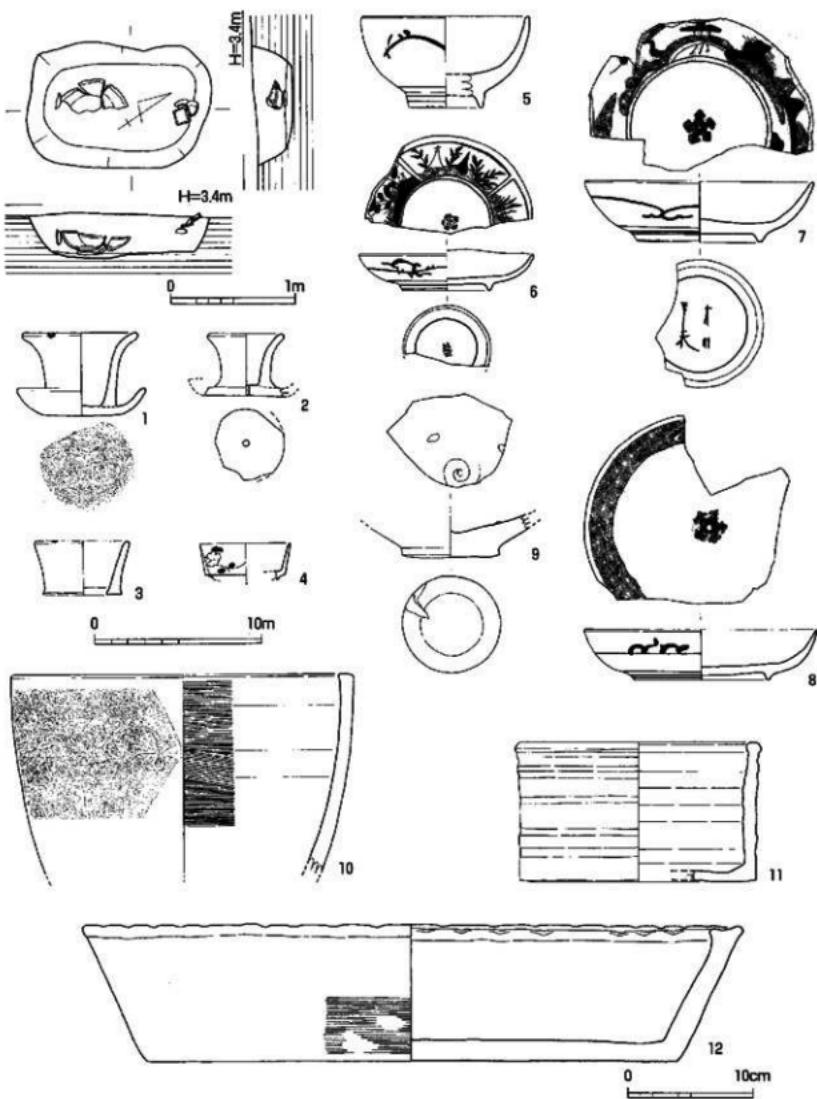
1～3は土師器の灯明皿である。糸切りの小皿に背の高い筒状の部分を貼り付けている。煤が小範囲に丸く付着する灯芯痕が1に1ヶ所、3に2ヶ所認められる。油皿と受皿の2枚の皿を重ねる灯篭の役割を1枚で果たすものか。ただ、2は底部中央に焼成前に小孔が穿孔されている。1は口径6.8cm、器高4.9cm、受皿径7.6cmを測る。4は色絵の小环である。外側面に赤絵で梅樹文を描く。5は波佐見焼のくらわんか碗である。外面に雪輪草花文を描く。器内が厚く、復元口径10.0cm、器高5.4cm、底径4.4cmを測る。6～8は肥前染付の皿である。6は小ぶりの皿で、見込にコンニャク印判による五弁花文、高台に「筒江」銘を有する。佐賀県杵島郡山内町の筒江窯の製品。復元口径10.4cm、器高2.2cm、底径5.2cmを測る。7は見込にコンニャク印判による五弁花文、内側面に山水文を描き、高台には「大明年製」の銘を有する。復元口径13.6cm、器高3.6cm、底径7.4cmを測る。8は見込にコンニャク印判と手書きによる五弁花文、内側面には濃み地に白抜き文様を施す。底部中央に1点のハリ支え痕が認められる。復元口径13.8cm、器高3.0cm、底径8.0cmを測る。呉須はやや縁がかる。9は白磁で皿か。見込みに胎土目跡が認められ、底部は高台がなく周縁部の釉を環状に掻き取る。10は瓦質土器の火鉢である。復元口径17.2cmで長胴のタイプである。輪積み成形で外面に草花文を印刻し、内面には横刷毛を施す。11は焼締陶器の火入れである。復元口径19.4cm、器高13.1cm、底径18.8cmを測る。外面に指で5条の僅みをつける。12は陶器で大型の盤である。復元口径52.4cm、器高10.8cm、底径42.0cmを測る。口縁部を指で押さえ凹凸をつける。出土遺物より18世紀代に位置づけられる。

### S X 1 6 (第7図)

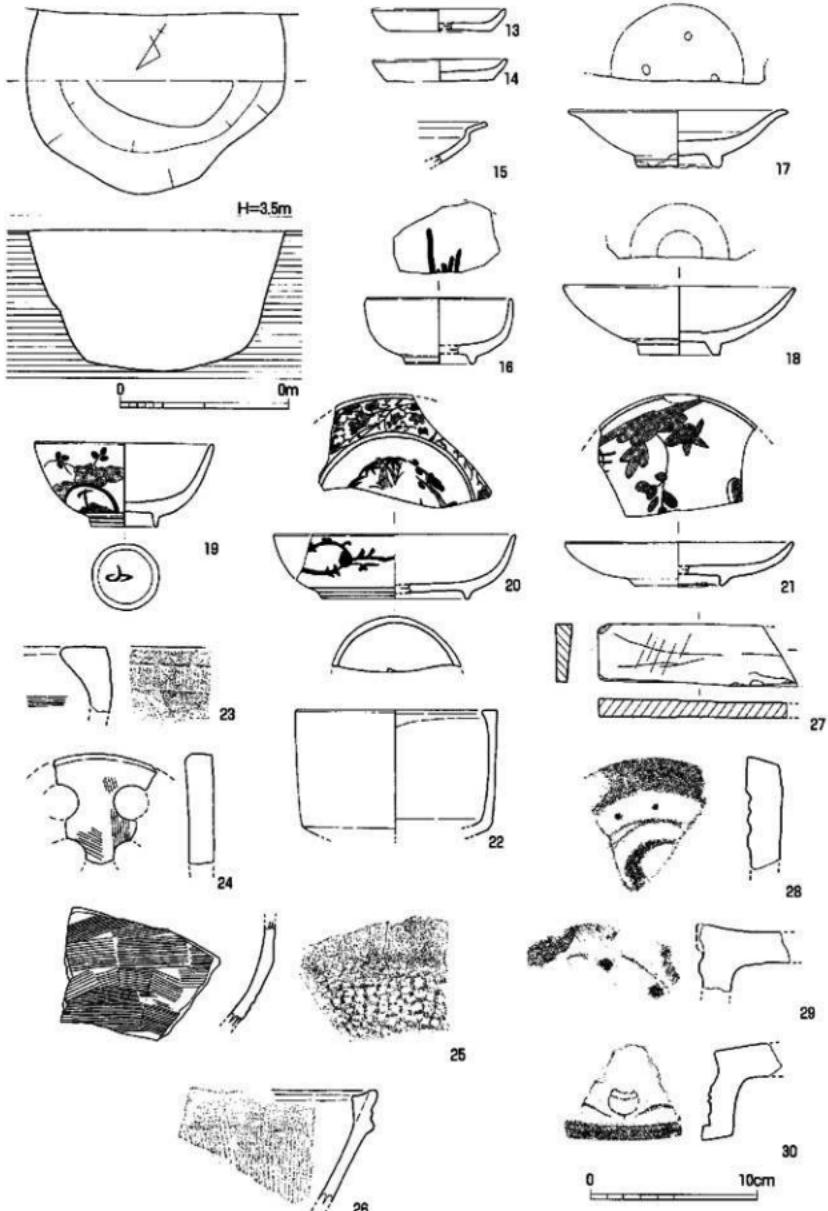
第1面で検出した深い略円形の土壙で南側は調査区外へ延びる。径3.1m、深さ1.7mを測る。埋土は黒褐色土で径2～3cmの炭化物ブロックを多く含む。底が出たので井戸ではない。

#### 出土遺物

13、14は土師器小皿である。いずれも底部糸切りで13は復元口径8.0cm、器高1.3cm、底径6.2cm、14は復元口径8.0cm、器高1.3cm、底径6.4cmを測る。15は肥前陶器の皿である。鉛縁の口縁部で内面に銅線軸、外側に透明釉を掛け分ける。17世紀後半。16は肥前陶器の小碗である。見込に鉄絵を描き、高台は土見せである。17、18は白磁皿である。17は見込に胎土目跡を残し、高台にわずかに切込みを入れる。高台は露胎である。18は見込部分の釉を輪状に掻き取る。高台は露胎である。19は波佐見焼のくらわんか碗である。完形品で口径10.6cm、器高5.0cm、底径4.0cmを測る。外側面に雪の輪草花文を描き、高台に銘を有する。20、21は肥前染付の皿である。20は見込に松竹梅文、内側面に唐草文を描く。18世紀後半。21は高台径が小さく、疊付には砂が付着している。復元口径13.6cm、器高2.6cm、底径5.2cmを測る。17世紀前半か。22は青磁の香炉である。外側に明綠灰釉、内面は露胎である。23は瓦質土器の火鉢である。24は焜炉(七屋)の目皿である。25は瓦質土器の鍋か。外側に煤が付着する。26は陶器の擂鉢である。27は砥石である。28、29は三巴文の軒丸瓦である。30は軒平瓦で宝珠状の文様が認められる。出土遺物は17～18世紀にかけて時期的なばらつきがある。18世紀後半の廃棄土壙であろうか。



第6図 SK 09および出土遺物実測図（1／40、10～12は1／4、他は1／3）



第7図 SX 16 および出土遺物実測図 (1/60、1/3)

### 3. 中世の遺構と遺物

#### 1) 瓦溜まり

##### SD 05 (第4・5図)

調査区を横断する帯状の瓦溜まりを検出した。第1面東側で遺構検出時に瓦が大量に出土することを確認し、瓦を残しながら清掃したところ幅1.4m程度の帯状に分布することがわかった。写真撮影後、2ヵ所にトレーナーを設定し断面形態を確認、深さ50cm程度の溝で下層まで瓦が含まれていた。したがって、この溝状の瓦溜まりをSD 05とし、第2面で完掘した。反転後、調査区西半でも瓦溜まりの続きを検出した。西端部は擾乱により消失するが調査区内で約9.7mを検出、さらにおそらく東西両方向とも調査区外へも延びるようである。

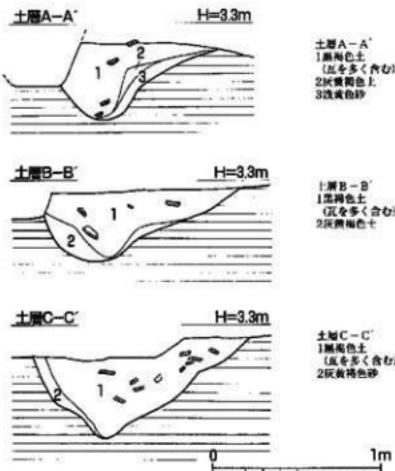
SD 05土層断面図(第8図)に示すように、大量の瓦を包含する黒褐色土の下に溝の肩が崩れ落ちたと考えられる堆積層がある。また、瓦の出土状態より瓦は溝の北側から投げ込まれている。さらに、第1面で検出した瓦溜まりの範囲は第2面で掘り上げた溝と平行しつつも、厳密に言えば溝の北壁の外まで広がる。したがって、実際には溝SD 05の掘削とそこへの瓦の投棄は同時期ではない。溝の北側にあった建物が倒壊した折、瓦を含む瓦礫類を溝に投棄したものと考えている。

大量の瓦の出土およびその状況から溝北側のすぐ近くに瓦葺き建物が存在したことは確実であるが、残念ながら柱穴は検出できなかった。瓦溜まりが10mちかく続くことから、おそらく倒壊して、この溝はもともと堀沿いの兩落ち溝だったのではないか。

以下に、第1面で出土した遺物をSD 05上層出土遺物、第2面の確実に溝内から出土した遺物をSD 05下層遺物として報告する。ちなみに瓦類は上層下層合わせて、丸瓦415、平瓦986、その他・小片761点の計2,162点が出土した。出土遺物よりこの瓦溜まりの形成時期は16世紀頃と考えられる。

##### SD 05瓦溜まり上層出土遺物(第9・10図)

第9図31は土師器小皿である。底部糸切りで復元口径6.8cm、器高1.4cm、底径5.8cmを測る。32は土師器杯である。底部糸切りで口径12.0cm、器高2.3cm、底径8.6cmを測る。33、34は龍泉系青磁碗である。33は外面に細い蓮弁文を施し、釉は緑色を呈する。復元口径14.0cm。15世紀後半頃のもの。34の底部は厚く外底は露胎である。35は李朝の白色陶器碗である。底径4.8cmで、高台置付と内面見込に4つの白色目跡が認められる。釉調は白濁した灰白色である。36~38は瓦質の火鉢である。口縁部外面に36は菊文を、37は雷文帯を型押しする。39は土鍋である。内面には細かい横刷毛を密に施し、外表面は粗いナデ調整で煤が付着する。40は土製人形である。型つくりの仏像の上半身部分で、型に当てて成形し、背面には型押しの際の指頭痕がくっきりと残る。41~43は軒丸瓦の瓦当である。三巴文で、41、43は珠文が小さく、30個が配される。



第8図 SD 05瓦溜まり土層実測図(1/30)

(1/30)

したがって、

実際には溝SD 05の掘削とそこへの瓦の投棄は同時期ではない。

溝の北側にあった建物が倒壊した折、瓦を含む瓦礫類を溝に投棄したものと考えている。

大量の瓦の出土およびその状況から溝北側のすぐ近くに瓦葺き建物が存在したことは確実である

が、残念ながら柱穴は検出できなかった。瓦溜まりが10mちかく続くことから、おそらく倒壊があっ

て、この溝はもともと堀沿いの兩落ち溝だったのではないか。

以下に、第1面で出土した遺物をSD 05上層出土遺物、第2面の確実に溝内から出土した遺物

をSD 05下層遺物として報告する。ちなみに瓦類は上層下層合わせて、丸瓦415、平瓦986、そ

の他・小片761点の計2,162点が出土した。出土遺物よりこの瓦溜まりの形成時期は16世紀頃と

考えられる。

30

SD 05瓦溜まり上層出土遺物(第9・10図)

第9図31は土師器小皿である。底部糸切りで復元口径6.8cm、器高1.4cm、底径5.8cmを測る。

32は土師器杯である。底部糸切りで口径12.0cm、器高2.3cm、底径8.6cmを測る。33、34は

龍泉系青磁碗である。33は外面に細い蓮弁文を施し、釉は緑色を呈する。復元口径14.0cm。

15世紀後半頃のもの。34の底部は厚く外底は露胎である。35は李朝の白色陶器碗である。底径

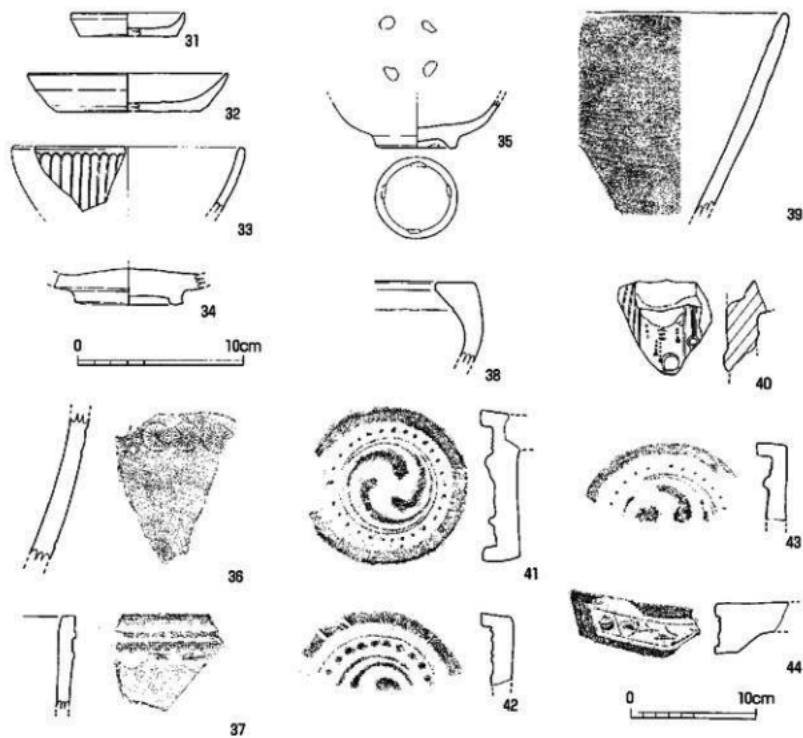
4.8cmで、高台置付と内面見込に4つの白色目跡が認められる。釉調は白濁した灰白色である。

36~38は瓦質の火鉢である。口縁部外面に36は菊文を、37は雷文帯を型押しする。39は土鍋

である。内面には細かい横刷毛を密に施し、外表面は粗いナデ調整で煤が付着する。40は土製人形

である。型つくりの仏像の上半身部分で、型に当てて成形し、背面には型押しの際の指頭痕がくっ

きりと残る。41~43は軒丸瓦の瓦当である。三巴文で、41、43は珠文が小さく、30個が配される。



第9図 SD 05 瓦溜まり上層出土遺物実測図① (36、37、41~44は1/4他は1/3)

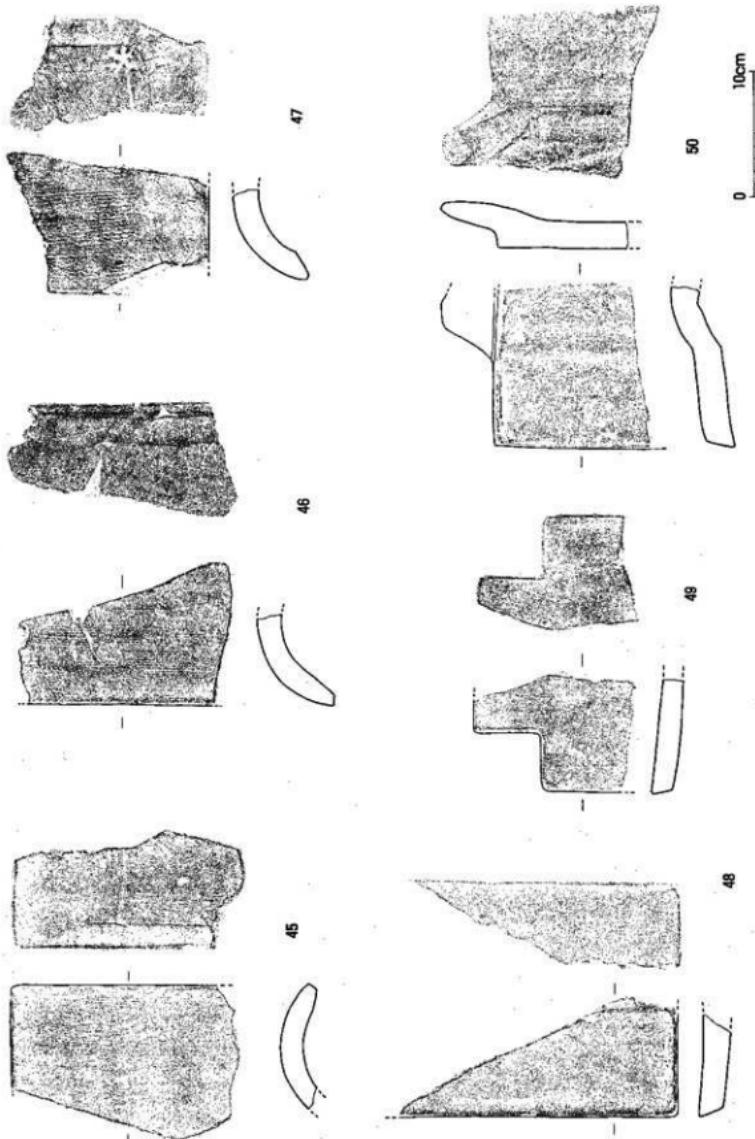
いずれも胎土が砂質で、焼成が悪く黄灰色を呈する。42は周囲の珠文は大きく、24個に復元できる。44は軒平瓦である。唐草文を施し、端部を界線で区切った中に宝珠状の模様をもつ。

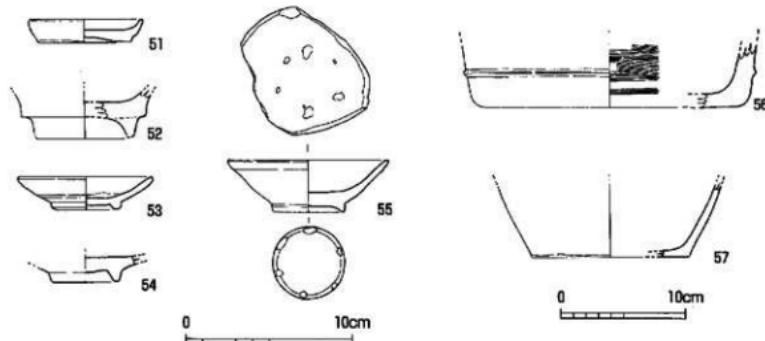
第10図 45~47は丸瓦である。凸面に繩目叩き、凹面に布目痕跡が残る。48、49は平瓦である。49は角を切り取っている。50は道具瓦である。

#### SD 05 瓦溜まり下層出土遺物（第11図）

51は土師器小皿である。底部糸切りで口径 6.8cm、器高 1.4cm、底径 5.5cm を測る。内面の一部が被熱している。52は土師器である。高台がつく鉢状の器種か。53は李朝の白色陶器の小皿である。復元口径 8.0cm、器高 2.0cm、底径 4.2cm を測る。胎土は黄白色で黒色粒を少し含み、釉は不透明の灰白色で内面見込と底面の高台内は施釉しない。54は陶器の碗である。底径 4.0cm。胎土は赤褐色で、釉は高台部に梅花皮が見られ、疊付のみ施釉しない。李朝か。55は李朝の灰青陶器の皿である。全面に施釉し、高台疊付と内面見込に 6 つの砂目跡が認められる。口径 9.6cm、器高 3.1cm、底径 4.2cm を測る。56は瓦質土器の火鉢である。底部のすぐ上に 1 条の凸帯があり、内面に横刷毛、外面上に横ナデを施す。57は褐釉陶器の壺である。器壁が薄く、内外面に褐釉を施釉する。

第10図 SD05瓦割り上層出土遺物実測図②(1/4)





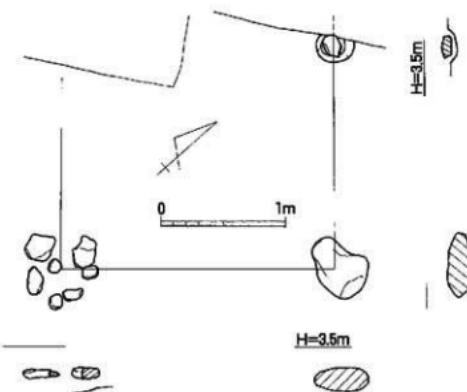
第11図 SD 05瓦溜まり下層出土遺物実測図 (56、57は1/4、他は1/3)

## 2) 掘立柱建物 (S B)

第1面において掘立柱建物2棟を検出した。表土を剥いだ段階で柱穴はほとんど削られてしまつたが、根石を確認できた。2棟の建物は軸方向をほぼ同じくして並んでいる。時期を比定できる遺物は出土していないが、両建物ともに中世後期のSD 05瓦溜まりを切っているので、それ以前である。建物の軸はSD 05ともほぼ同じであり、この軸方向が当時の建物の立地を規定する街路の方向でもあったのではなかろうか。

### S B 35 (第12図)

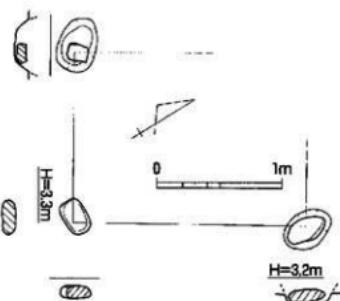
第1面の調査区東側で検出した1間×1間以上の規模の掘立柱建物である。柱穴に根石を据えており、柱穴自体は削られてほとんど残っていない。西隅の柱穴は試掘トレレンチにかかり消失していた。桁行1.8m、梁間2.2mで主軸方位は磁北より63°西偏する。根石の形態は一様ではなく、東隅のものは長さ50cmの大きな一枚石を使っているが、南隅のものは20cm四方程度の石を方形に組み合わせて配置している。また、北隅の根石は20cm四方の石を1枚使っており、柱穴自体も小さめである。したがって、この柱は桁の途中の柱であり、北側の調査区外へ建物が延びていると考えるのが妥当であろう。



第12図 SB 35実測図 (1/40)

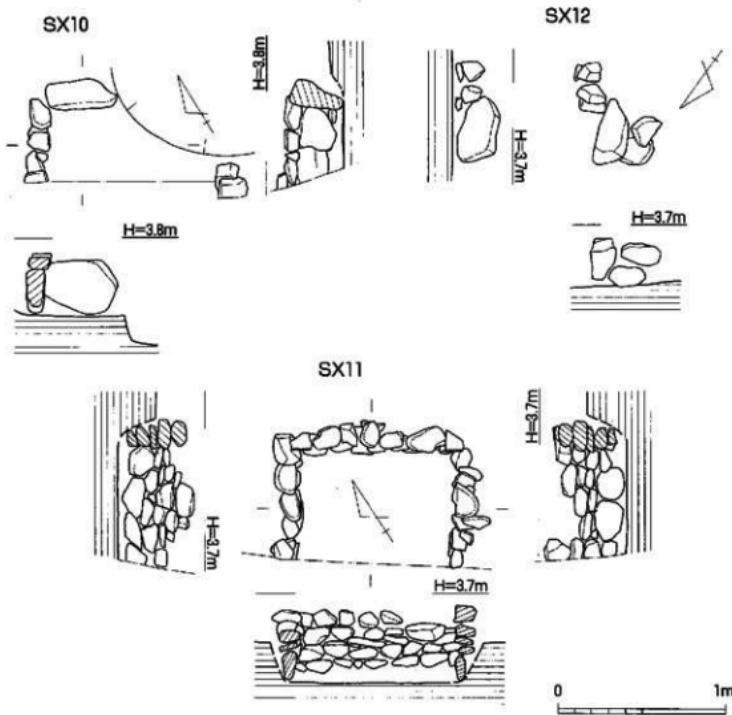
S B 3 6 (第13図)

第1面の調査区西側で検出した1間×1間の掘立柱建物である。柱穴は削られて深さ10cm程度が残るのみであるが、底に根石を据えている。根石は長さ30cmほどの扁平な石を1枚使用している。北隅の柱穴は後世の造構に切られて消失している。桁行(東西方向)1.8m、梁間(南北方向)1.4mで主軸方位は磁北より72°西偏する。この建物も瓦溝まりを切っている。



第13図 S B 3 6 実測図 (1 / 40)

### 3) 石組造構 (S X)



第14図 S X 1 0, 1 1, 1 2 石組造構実測図 (1 / 30)

調査区（第1面）の北西端にひっかかる形で石組造構3基を検出した。SX11は良好に遺存しているが、他の2基は別の造構に切られるなどして残りがよくない。この3基は1列に並んでいる。わずかながら中世後半（15～16世紀）の遺物が出土しており、中世の造構として報告している。しかし、石組造構の主軸方向は磁北方向から約45°西偏しており、15～16世紀のSD05瓦溜まりの方向とは異なり、かえって現在の街区の方向に近い。したがって戦国期の太閤町割り以降につくられた近世の造構である可能性も高い。

#### SX10（第14図）

第1面の西隅で検出した石組造構である。半分は調査区外で、東隅のコーナーはSK23に切られる。石組の内法で東西方向の幅1.0mを図る。1段目を長さ30～40cm、幅20cm程度の大きめの平たい石を使って組み、西壁ではその上に小石が整然と並べてある。遺物は土師器片が20点ほど出土したのみである。

#### SX11（第14図）

第1面の西壁で検出した。石組の内法で東西方向の幅が0.9mを図り、南北方向は0.6mを検出しさらに調査区外へ延びる。石組は概して4段残存する。径20cm以下の扁平な石を多く使っており、東西壁の1段目にはやや大きめの石が配してある。全体を検出できていない南北方向を主軸と見るならば、主軸方向は磁北から32°西偏する。

#### 出土遺物（第15図）

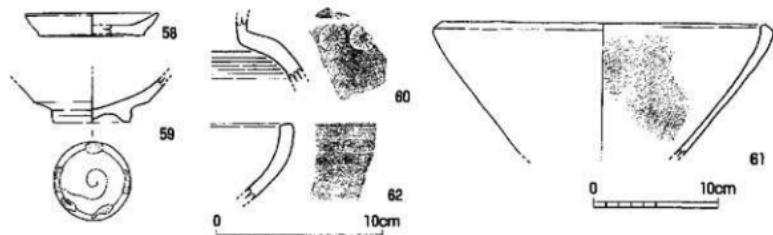
58は土師器小皿である。底部は糸切りで口径8.0cm、器高1.4cm、底径6.4cmを測る。59は李朝の白色陶器の碗である。疊付に4つの砂目が残り、胎土は軟質で黒色粒を多く含む。底径4.6cm。60は瓦質土器である。壺形の頸部で、肩外面に菊花文のスタンプを押す。61は土師質の擂鉢である。口径27.2cmを測る。出土遺物より16世紀に位置づけられよう。

#### SX12（第14図）

第1面の西端で検出したが、調査区境界にかかり、さらに擾乱や別の造構によって破壊されているため、全容は不明である。幅40cmの平石を立てているので石組の一部と考えている。

#### 出土遺物（第15図）

62は瓦質の火鉢である。外面に小さな花文を2列に配したスタンプを押す。



第15図 SX11、12出土遺物実測図（1／3、1／4）

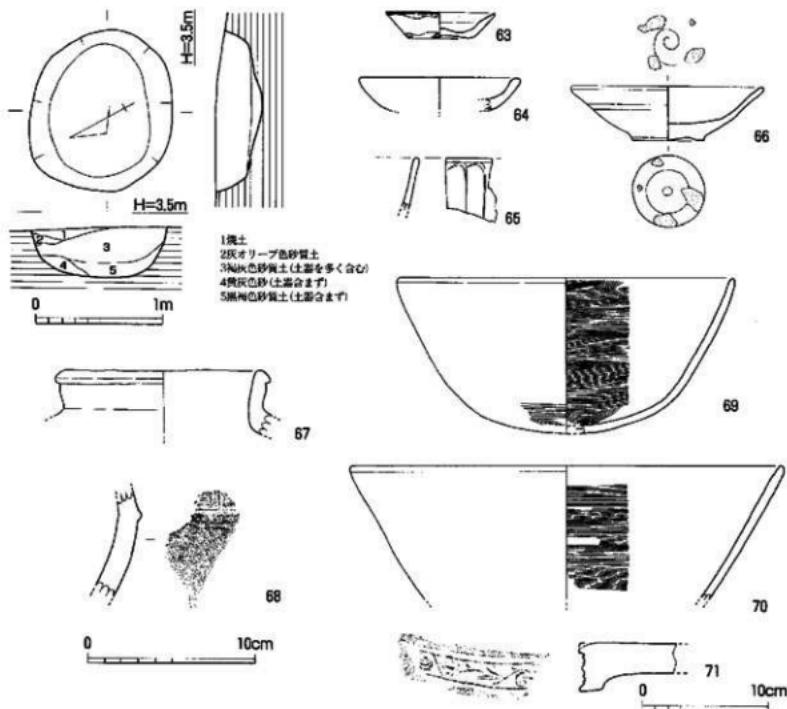
#### 4) 土壌 (SK)

##### SK 03 (第16図)

第1面東側で検出した略円形の土壌である。径1.1~1.3m、深さ40cmを測る。埋土は上層が暗褐色土、下層が黄灰色砂である。

##### 出土遺物

63は土器小皿である。底部は糸切りで口径6.5cm、器高1.6cm、底径3.6cmを測る。口縁部および底部に煤が付着する。64は青磁の皿である。口径9.6cmを測り、肉厚で釉調は灰オリーブ色を呈する。65は龍泉窯系青磁碗で上田分類B-III類にあたる。外面に細い蓮弁文を施文する。66は李朝の灰青陶器の皿である。内面見込と底面疊付に4つずつ砂目跡が付着する。胎上はうすい褐色で白色粒を含み、釉調は灰オリーブ色を呈する。口径11.4cm、器高3.2cm、底径4.2cmを測る。67は焼締陶器の撇口縁部である。口径12.8cmを測り、赤褐色を呈する。68は瓦質土器の火鉢であろう。外面に雷文帶を型押しし、その直下に1条の突帯を巡らせる。内面に刷毛目を施す。69、70は土鍋である。体部から口縁部にかけてまっすぐに開く。69はほぼ完形で口径26.8cm、器高12.4cm、70は口径34.4cmを測る。いずれも内面に密に横刷毛を施し、外面には煤が厚く付着している。71は軒平瓦である。主文様は唐草文で、端部を界線で区切った中に宝珠文を配する。



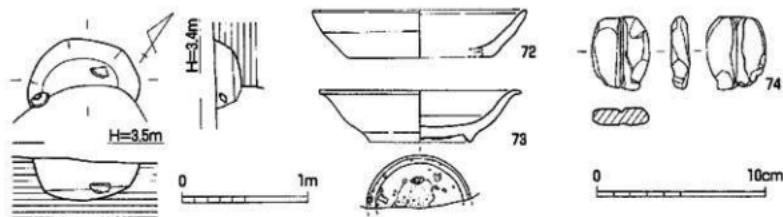
第16図 SK 03 および出土遺物実測図 (1/40, 69~71は1/4、他は1/3)

#### SK 04 (第17図)

第1面の北寄り、SK 03の西隣で検出した土壙である。擾乱によって半分ほど破壊されている。幅0.9m、深さ30cmを測る。埋土は黒褐色砂質土である。

#### 出土遺物

72は土師器の环である。復元値で口径12.8cm、器高2.8cm、底径8.6cmを測る。73は景德鎮の青磁皿である。明緑灰色釉を全面に施釉し、底面には砂粒が付着する。砂目状ではなく一面に付着しており、砂を敷いた床で焼成したものである。口径12.0cm、器高3.1cm、底径6.1cmを測る。74は滑石製の鍤である。長さ4.8cm、幅3.4cm、厚さ1.1cmを測る。出土遺物より16世紀に位置付けられる。



第17図 SK 04および出土遺物実測図 (1/40, 1/3)

#### SK 20 (第18図)

調査区の中央で検出した土壙で、SK 16、擾乱などに切られる。平面形は略円形で径1.5m程度に復元でき、深さは90cmを測る。埋土は黒褐色土である。SD 05瓦溜まりを切っており、瓦が多く出土した。

#### 出土遺物

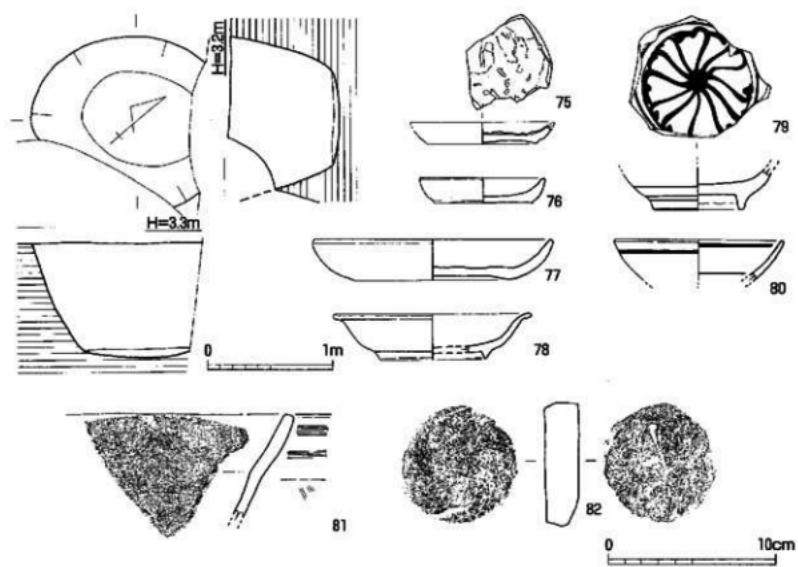
75、76は土師器小皿である。75は二次的な被熱を受けて硬質化し、内面には銅が溶着している。铸造関係の行為に使用されたものか。いずれも底部は糸切りで、75は口径8.6cm、器高1.3cm、底径6.4cm、76は口径7.4cm、器高1.5cm、底径5.9cmを測る。77は土師器の环である。体部からの立ち上がりは丸みを帯び、底部は糸切りで口径14.2cm、器高2.4cm、底径9.2cmを測る。78は白磁皿、森田分類E-2類である。釉調は不透明な白色である。疊付に砂が付着している。口径11.8cm、器高2.7cm、底径6.2cmを測る。79、80は明代の染付である。79は碗で、小野分類碗B群にあたる。見込にねじ花文を描く。80は基筒底の小野分類皿C群であろう。口径10.0cmを測る。81は土鍋である。口縁部の下で軽く曲がる。外面に薄く煤が付着する。82は瓦玉である。出土遺物より16世紀に位置づけられる。

#### SK 21 (第19図)

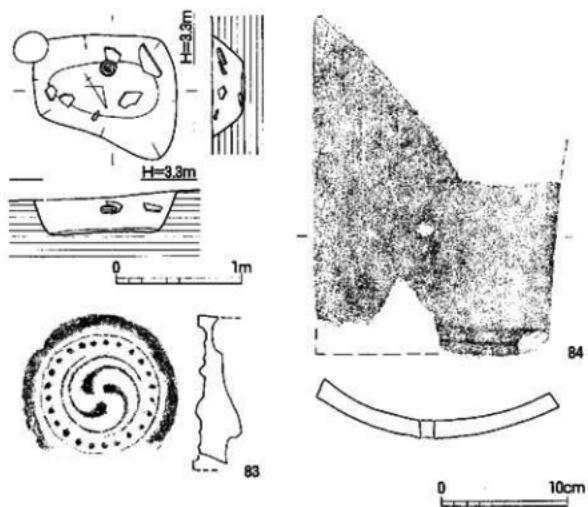
第1面中央で検出した隅丸方形の土壙である。長軸1.1m、短軸0.8m、深さ30cm弱を測る。埋土はうすい褐色土である。

#### 出土遺物

83は軒丸瓦である。三巴文で珠文を24個配している。84は平瓦で、中央に釘穴がある。



第18図 SK 20および出土遺物実測図（1/40、1/3）



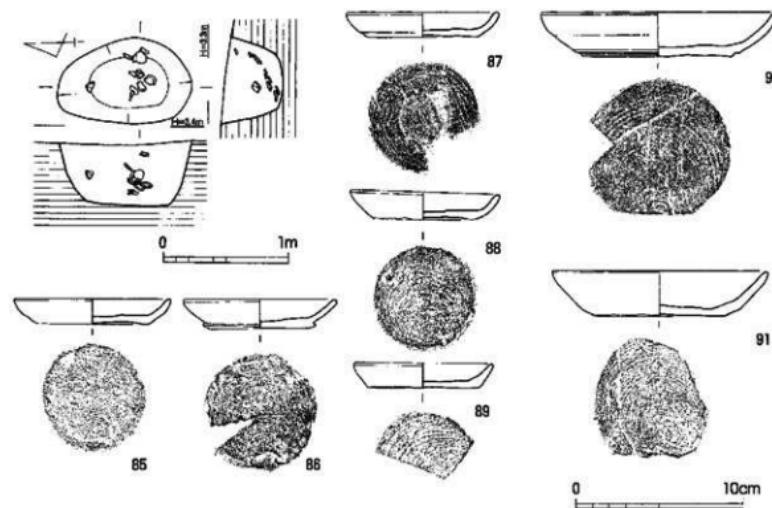
第19図 SK 21および出土遺物実測図（1/40、1/4）

### SK 22 (第20図)

第1面西側で検出した楕円形の土壌である。長軸1.1m、短軸0.7m、深さ50cmを測る。埋土はほかの中世遺構群と異なり、灰黄色砂質土である。

#### 出土遺物

85~89は土師器小皿である。いずれも底部糸切りで、色調は橙色である。法量(口径-器高-底径)は、85が9.4-1.5-6.6cm、86が9.2-1.8-6.8cm、87が9.2-1.5-6.4cm、88が9.0-1.8-6.0cm、89が8.4-1.5-6.6cmである。90、91は土師器の壊である。いずれも糸切りで、90は口径14.0cm、器高2.7cm、底径9.0cm、91は口径12.8cm、器高2.7cm、底径8.0cmを測る。



第20図 SK 22および出土遺物実測図 (1/40、1/3)

### SK 24 (第21図)

第1面西側で検出した土壌である。半分ほどが既存建築物のコンクリート基礎によって破壊される。深さ15cmを測る。

#### 出土遺物

92は李朝の白色陶器の皿である。胎土はきめが細かく黒色粒をわずかに含み、釉調はピンクがかった灰白色を呈する。見込みに12個の砂目があり、疊付は無釉で高台内側面に砂がわずかに付着する。口径18.4cm、器高4.7cm、底径7.8cmを測る。93は陶器の片口である。暗赤灰色を呈する。94は土師質の擂鉢である。つくりが粗く、灰白色を呈する。

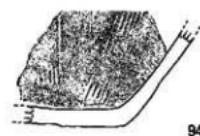
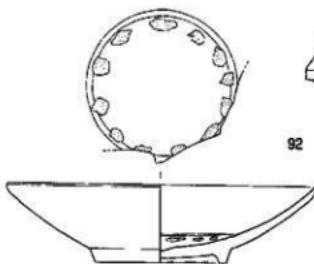
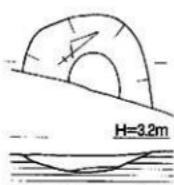
SK 28 (第21図)

第2面の中央で検出した円形土壙である。径60cm、深さ25cmを測る。

出土遺物

95～98は土師器である。いずれも底部糸切りで、色調は98が暗灰黄色、それ以外がにぶい橙色を呈する。95、96は環で、95が口径13.6cm、器高2.6cm、底径9.2cm、96が口径13.0cm、器高2.9cm、底径8.6cmを測る。97、98は小皿で、97が口径8.4cm、器高1.8cm、底径6.6cm、98が口径8.2cm、器高1.6cm、底径6.6cmを測る。97は板目圧痕を有する。99は陶器の描鉢である。

SK24

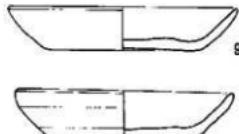
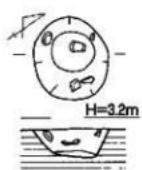


92

93

94

SK28



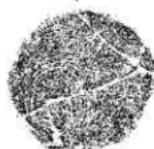
95



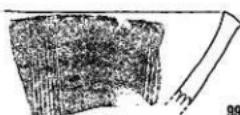
97



98

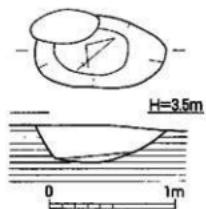


96

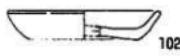


99

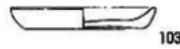
SK33



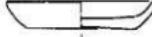
100



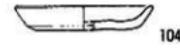
102



103



101



104



10cm

第21図 SK 24、28、33 および出土遺物実測図 (1/40、1/3)

### SK 33 (第21図)

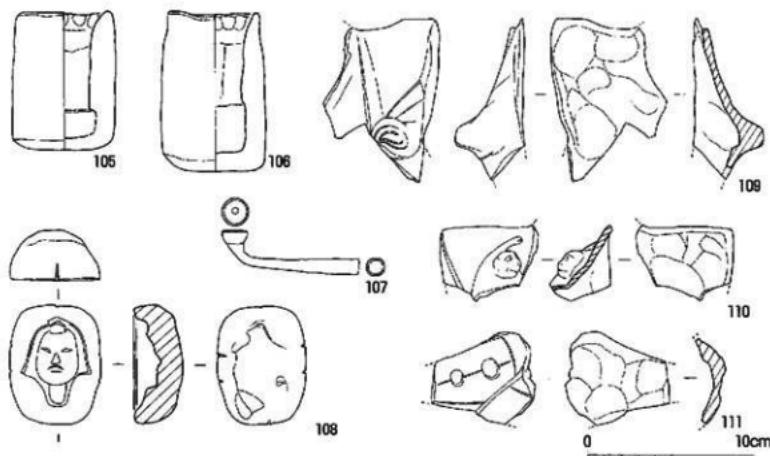
第2面の中央からやや西側で検出した。椭円形の土壌で、長軸1.0m、短軸0.6m、深さ30cmを測る。

#### 出土遺物

100は土師器の坏である。底部糸切りで口径13.6cm、器高2.9cm、底径9.6cmを測る。灰黄色を呈する。101~104は土師器の小皿である。いずれも底部糸切りで橙色系の色調である。法量(口径-器高-底径)は、101が完形品で8.9-1.7-6.5cm、102が9.0-1.7-6.4cm、103が8.6-1.3-7.0cm、104が8.2-1.4-5.6cmを測る。

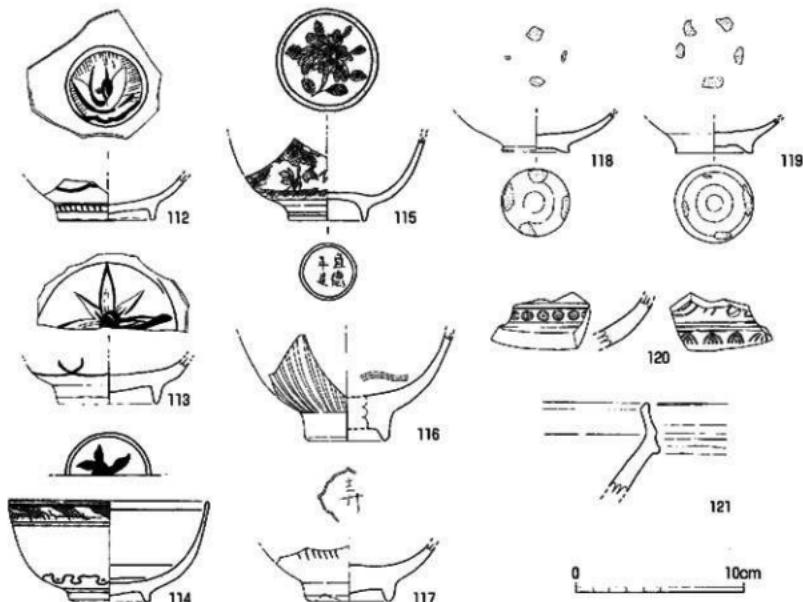
#### 4. その他の出土遺物

包含層や柱穴、攪乱などから多くの遺物が出土している。本節ではそれらの中で特に報告を要するものを抽出して紹介する。



第22図 その他の出土遺物実測図① (1/3)

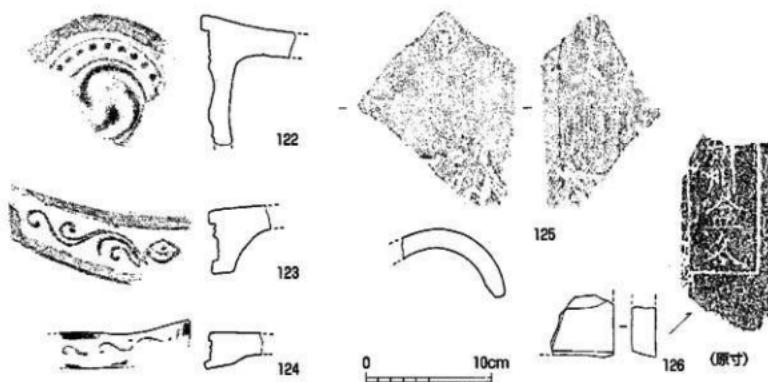
第22図は近世の遺物である。105、106は塩臺である。肉厚でかなり重い。被熱により硬く焼け締まり、赤橙色を呈する。内面調整は口縁部に指頭痕、胴部に布目痕を認める。粗製品で押印はない。105が胴部径6.0cm、器高8.2cm、106が胴部径6.2cm、器高9.5cmを測る。107はキセルである。青銅製で長さ8.1cmを測る。108~111は博多人形関係の遺物である。博多人形については太宰府市教育委員会の山村信榮氏に御教示を得た。108は首人形の型である。首人形は文字通り顔だけで完結した商品として売られ、布等で作った胴体に首人形を挿して飾る。外面に刻み目が8ヶ所つけられていることから2つの型を前後から合わせる、合わせ型とわかる。正面側の型だけになるタイプのものは、型押しのおもちゃとして型自体が流通していたと見られ消費地でも出土するが、合わせ型は出土例が少なく人形の製作施設で使用されたものである可能性が高いとのことである。首人形の意匠は歌舞伎を題材とするものが多く、これは「勧進帳」と考えられる。109、



第23図 その他の出土遺物実測図② (1/3)

110は證井型の笠野才藏である。辯を着た人物が猿を連れている意匠で、抱廻除けのお守りである。111は武者人形の前腕で手甲をついている。類似品に今宿小学校科学館所蔵の大橋重雄作、今宿人形「加藤清正」がある。105~108が第1面包含層、109~111が攪乱からの出土である。

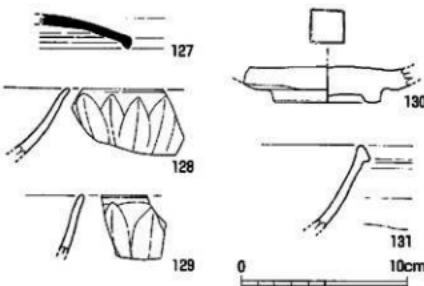
第23図は中世後期の遺物である。112~115は明代の染付である。112は碗で、見込に花文を描くが線はぼんやりしている。釉調は淡い水色で疊付のみ無釉である。底径5.6cmを測る。113は小野分類の碗C群かD群である。15世紀後半~16世紀前半。114は小野分類の碗D群か。外面は口縁部に波涛文帯、見込に花文を描く。全面に施釉し、疊付に砂が付着する。口径11.8cm、器高6.0cm、底径4.8cmを測る。115は小野分類の碗E群である。饅頭心の底部で見込と外面に花文を描く。明瞭な線書きの上から濃みをつける。高台に「宣德年製」の銘を有する。16世紀のもの。116、117は青磁である。116は碗で内外面に櫛描文を施す。釉調は明緑色で高台内は露胎である。底径5.0cmを測る。117は碗で外面に櫛描文を施すし、見込に「壽」のスタンプを押す。釉調は明緑色で高台内は露胎である。底径5.4cmを測る。118~120は李朝の陶磁器である。118は灰青陶器で見込と底面に4つずつの砂目が認められる。胎土は精緻で釉調は灰オリーブ色を呈する。119は白色陶器で、見込に5個、疊付に4個の砂目を有する。胎土は灰白色で粗く、釉調は灰白色を呈する。120は粉青沙器である。内外面に白色の化粧土で象嵌し、緑灰色釉をかける。121は備前焼の播鉢である。赤褐色を呈する。113~115が攪乱、それ以外が第1面包含層からの出土である。



第24図 その他の出土遺物実測図③ (1 / 4)

第24図は中世後期の瓦である。122は軒丸瓦である。三巴文で珠文は大きめである。123、124は軒平瓦である。123の文様は中央に宝珠、その両側に唐草文を配する。124はS字形の簡略化した唐草文様を並べる。125は丸瓦である。凹面に模骨痕跡が残る。126は平瓦で、側面に押印がある。「新川盆久」か。いずれも第1面包含層から出土した。

第25図は中世前期以前の遺物である。127は須恵器の坏蓋である。SK01に混入していた。128～130は龍泉窯系青磁碗である。128、129は外面に鎧蓮弁文を施している。130は底部で見込に正方形のスタンプを押すが、中の字は痕跡が見えない。底面は露胎である。128はSK22、129はSX11、130はSK21に混入していた。131は白磁碗IV類である。小さめの正縁口縁で、釉調は灰白色を呈する。SK09に混入していた。



第25図 その他の出土遺物実測図④ (1 / 3)

## 第四章 まとめ

博多遺跡群第137次調査では、標高3.2~3.5mの第1面、標高3.0~3.3mの第2面の2面について調査を実施した。地形は西から石堂川のある東側に向かってごく緩やかに傾斜している。遺構検出面はなかば任意に設定したものであり、第1面では中世後期から近世(15~18世紀)、第2面では15、16世紀の遺構群を検出した。主な検出遺構は溝状の瓦溜まり1条、掘立柱建物2棟、石組遺構3基、土壙25基、ピット多数である。遺構密度は博多にしては高くなく、井戸が1基もかかっていない。本地点に市街が形成されるのは中世後期のようである。

主な出土遺物は、近世では国産陶磁器、土師器の小皿・灯明皿、瓦質の火鉢、博多人形などが、中世後期では輸入陶磁器(明代の染付、李朝の陶磁器)、瓦、土師器の壺・小皿などがある。また、古代の須恵器と12、13世紀の輸入陶磁器がごく少量あるが出土している。遺物総量は発掘調査段階で大コンテナ26箱、整理段階で小コンテナ60箱である。

今回の調査では溝状の瓦溜まりSD05が注目される。土層の堆積状況や瓦の分布範囲の検討から、溝の開削とそこへの瓦の投げ込みには時間的ずれが存在する。大量の瓦が出土したことから調査区内あるいはそのごく近隣に瓦葺きの建物があった可能性が高く、何らかの理由でその建物が倒壊した際、建物の南側にあった溝に瓦を含む瓦礫類を廃棄した状況が読み取れる。この廃棄行為=溝の埋没の時期は出土遺物より16世紀頃と考えられる。

ところで、溝の方位は当然その周囲の建造物に強く規制されており、当時の町筋の方位を示している可能性が高い。これまでの博多遺跡群の調査において多くの溝や道路が検出されており、祇園町周辺の調査の成果から、「太閤町割」以前に文献資料には残っていない別の町割が存在したことが明らかになったことは周知の事実である。この町割の問題について触れておく必要があろう。SD05は磁北から約30°東偏する方向に軸を取るが、周辺の事例はどうであろうか。残念ながら、本調査区近辺での調査事例はまだまだ少ない。道路を扶んですぐ東側の第53次調査区では、14~16世紀の溝2条が検出されている。2本の溝は並行し、幅50cm程度で磁北から約60°東偏した方向に軸を取る。近隣で検出された溝はこれだけであるが、時期が重なるものの軸が異なる。今後の事例の増加を待たねばなるまい。中世息浜(=沖の浜)の町割については、息浜の西南部と東北部とでは別個の町割が並存しており、その両町割を小武氏と大友氏とが博多を分治したという『海東諸国記』の記事と関連付けた佐藤一郎氏の説がある(福岡市教育委員会2002『博多84』福岡市報告書第710集)。

近世では博多人形関連の遺物が数点出土している点が注目される。残念ながら、諸々の事情から博多地区において近世の遺構を詳細に調査する事例は少ない。しかし、近世についてもよく分からぬことが多いと、とくに博多人形などは郷上が誇るべき伝統文化のひとつとして非常に価値ある遺物である。出土状況はよくないが、攪乱出土遺物として埋もれたままにするには忍びず報告した次第である。

# 図 版



発掘作業員のみなさん

図版1



(1) 西側第1面全景（北東から）



(2) 西側第2面全景（北東から）

## 図版2



(1) 東側第1面全景（西北から）



(2) 東側第2面全景（西北から）

図版3



(1) SD05瓦漏り検出状況（南から）



(2) SD05瓦漏り検出状況（北から）



(3) SK09（南西から）



(4) SK22（北から）

## 図版4



(1) SD05瓦溜り上層の瓦出土状況



(2) SD05土層C-C' (北から)



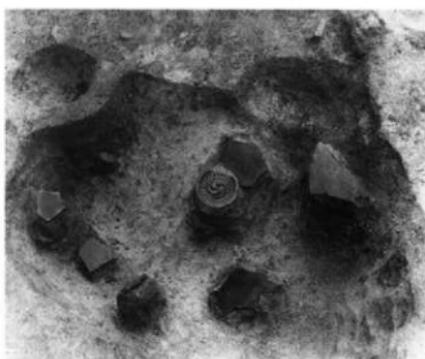
(3) SX11 (南東から)



(4) SK03 (西から)

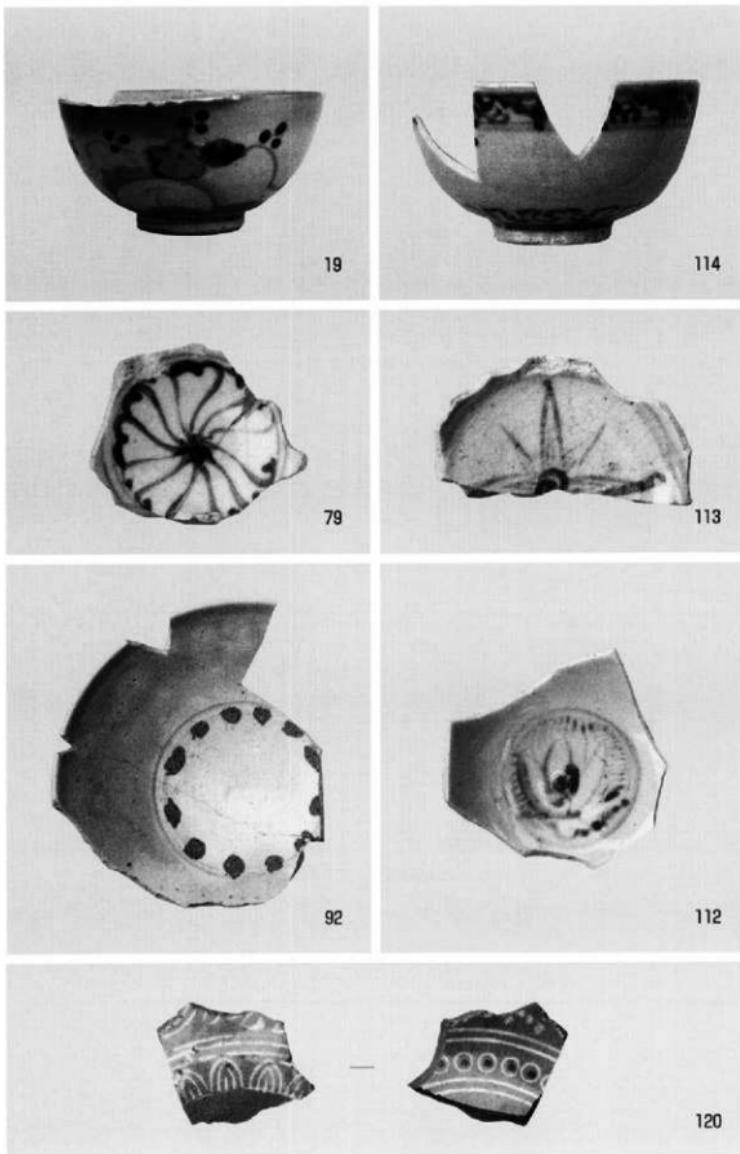


(5) SK20 (東から)



(6) SK21 (北から)

図版5



出土遺物① 陶磁器類

## 図版6



---

博 多 95

-第137次調査-

福岡市埋蔵文化財調査報告書第766集

2003年(平成15)年3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

☎ (092) 771-4667

印刷 株式会社 川島弘文社

福岡市東区箱崎ふ頭6丁目6番41号

☎ (092) 641-2665

---